

令和 5 年 5 月 9 日現在

機関番号：24405

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02028

研究課題名(和文) 自然環境破壊がもたらす民主主義：タイ東北部の「赤シャツ」運動とゴム栽培の因果関係

研究課題名(英文) Democratization by Nature Degradation: Interrelationship of 'Red-shirt' Movement and Transformation of Living Environment

研究代表者

藤田 渡 (Fujita, Wataru)

大阪公立大学・大学院現代システム科学研究科 ・准教授

研究者番号：10411844

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：タクシン元首相支持の「赤シャツ」グループの運動の主な支持者は北部・東北部の農民だと言われてきた。しかし、東北部でも、地域、村、個人のレベルで多様性が見られた。この多様性と生業や周囲の生態環境との関係を分析した。「赤シャツ」支持において対照的な二つの地域で現地調査を行い、比較分析をした。コアな支持者は、個人的な利益ではなく、「貧しい東北部の農民」として集合的にタクシン派政権から受けた恩恵に動機づけられていた。彼らは、政策的支援が必要なので民主主義が必要だった。一方、自然資源が豊かな地域では、地元の人たちは党派的政治から距離を置く傾向が強かった。生存戦略として政策的支援を前提としないからだった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

政治生態学では、環境の変化を政治経済との関連から考えてきた。これに対し、環境の変化が社会・政治的变化を起こすという視点を示すことができた。政治的民主化を求める人々については、これまで、所得の向上や学歴の向上がその要因という説明が多かったが、この研究では、むしろ、自然資源から切り離され、国家への依存が高まったことで、人々の民主主義への関心が高まるという、新たな視点を付け加えることができた。これらは、中進国化する東南アジア諸国の地域変動を理解する上で有益であろうと考えられる。

研究成果の概要(英文)：'Red-shirt' movement of pro-Thaksin group was reportedly mainly participated and supported by the farmers in the North and Northeast (Isan) regions. However, within Isan region, there were diversities in 'red-shirt' support. I examined the diversities in relation to transformation of local people's livelihood and surrounding ecological conditions, by means of case studies in two contrastive areas in support for 'red-shirt'. Core supporters of 'red-shirt' movement were motivated not by personal benefits but collective benefits to 'poor Isan peasants' given by various policies of Thaksin and pro-Thaksin administrations. They need democratic governments so that their requests for governmental supports are fairly considered. On the other hand, in the areas where natural resources were still abundant, local people tended to keep distant from factional politics. They did not presume governmental supports in their living strategy.

研究分野：政治生態学

キーワード：イサーン 農村 中進国 政治生態学

1. 研究開始当初の背景

2009年から2014年にかけて、タクシン元首相を支持する人々による、選挙による民主主義を求める大規模な政治運動が展開した。彼らは、グループの象徴として赤いシャツを着たため、「赤シャツ」と呼ばれた。「赤シャツ」はおもにタイ北部・東北部（イサーン地方）の農村出身者であった。「赤シャツ」に対しては、民主主義の発展として肯定的に捉える論者がいる一方で、タクシン政権の「パラマキ」政策につられた、とか、タクシンの圧倒的な資金力を買収された、という批判も見られた[玉田 2011]。しかし、実際には、例えば、イサーン地方でも、「赤シャツ」の動き非常に活発であった地域と、まったくなかった地域があった。

これまで、申請者は、このイサーン地方の農村で定着調査を行ってきた。かつてタイのなかで最も貧しい地方といわれたが、最近では、自動車、携帯電話、電化製品、衛星放送などが広く普及している。教育水準も向上した。申請者は、急速に拡大したゴム栽培により、こうした農村の都市化・中間層化が進行し、その裏側で、自然環境が劣化し、また、自然資源を基盤とした生活から離れ、市場経済への依存が高まったこと、を指摘してきた。

具体的には、除草剤による汚染が進んだ。キノコや山菜の資源量が減少しただけでなく、ゴムの収穫作業を連日、夜間に行うために、自然の食物を採取する機会が激減した。外食や「お惣菜」の購入が増えた。牛・水牛飼育の減少により有機肥料が作れなくなり、大型トラクター導入により水田脇の有用植物が姿を消した[藤田 2016]。

イサーン地方で「赤シャツ」のような政治運動が広がったのは、ゴム栽培により、従来の自然資源を基盤とする生活から離れ、市場経済システムへの統合（＝従属）が進んだため、生存基盤が不安定となり、政府の政策的支援への依存・期待が高まったからではないか、と推察された。

2. 研究の目的

こうした「仮説」を検証し、農民の政治的行動・意識の変化と、自然環境の劣化や生存基盤の変化（自然資源から市場経済依存へ）との相関関係を明らかにするために、次のような手順で研究を進めた。

広域的・定量的分析：

これまで、申請者が、イサーン地方農村で行ってきた定着調査で得られた知見を整理し、ゴムなど商品作物栽培の増加、所得・学歴の向上・生活スタイルなど社会経済的变化、自然環境の劣化、自然資源利用の変化、について、イサーン全体の傾向と地方内の変異を明らかにする。

その上で、「赤シャツ」など政治運動の地方内の偏差を明らかにする。

両者を重ね合わせ、相関関係を分析する。

定性的事例分析：

上記の広域的・定量的分析の結果をもとに、特徴のある地域をいくつか取り上げ、詳細な事例研究を行う。「赤シャツ」の盛り上がりとの相関の有無だけでなく、自然環境の劣化、自然資源を基盤とした生活から市場経済依存した生活への移行が、人々の政治家（中央・地方含む）の選好、政治への要求をどう変えたのかを分析し、農民の生存戦略としての政治的行動原理の変化を明らかにする。

申請者とタイの研究者が進めてきた共同研究では、ゴム栽培の浸透により、農民が、政策本位で政治家を選好する傾向が指摘された。また、協同組合による農民の組織化が進んだ事例も報告された。こうした政治的文脈と人々の組織化の関連性について、より詳細に明らかにする。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するために、イサーン全体の統計分析、ゴム栽培の多い県・少ない県での広域調査、村落レベルでの定性的事例分析、というマクロ＝ミクロの異なるスケールでの分析を有機的に組み合わせ、研究を進めた。

1) 広域的・定量的分析

ゴム栽培など生業の変化、社会経済変化、自然環境の劣化、政治的变化、それぞれにつき、地域全体の傾向と地域内変異の概要を把握し、ゴム栽培・環境変化と「赤シャツ」運動との因果関係を外形的に把握することを試みた。

統計的分析

イサーン地方全域、および、県・郡レベルでの内務省の「村落基本情報」から以下の項目を分析した。

調査項目：ゴム栽培面積・収穫面積、森林面積（ゴム園除く）、家畜飼育頭数、農家所得、自動車・バイク所有台数、携帯電話販売台数（契約数）、衛星放送受信者数

「赤シャツ」支持の指標として、2014年総選挙のタクシン派政党（プアタイ党）の比例代表での得票率と、2016年の憲法草案の国民投票の反対票率を用いた。

広域的調査

統計のみでは把握が困難な事象について、ゴム栽培の多い県（ウボンラチャタニ県）及び、ゴム栽培の少ない県（マハーサラカム県）を対象とし、広域的調査を行った。

政治的变化について：「赤シャツ」の多い地域／少ない地域間の比較研究を行った。

それぞれの地域で、生態環境の変化についても、ゴム栽培、里地里山環境での有用植物種の減少、農薬による汚染、などについて聞き取りを行った。

2) 定性的事例分析

ウボンラチャタニ県のなかで「赤シャツ」支持が対照的な2つの地域を選定し、「赤シャツ」支持の強い地域では、「赤シャツ」リーダー、村長など村落リーダー、多数派である「赤シャツ」支持農民、少数の不支持の農民に、個人的な履歴、生活・生業の状況、「赤シャツ」に接したきっかけ、などにつき、聞き取り調査を行った。もう一つの「赤シャツ」支持が弱い地域では、村長など村落リーダーに当時の状況などを確認するとともに、人々に、「赤シャツ」についてどのように理解し、なぜ支持しなかったのか、タクシン政権の諸政策からの恩恵についてどう考えるのか、などについて、聞き取りを行った。

4. 研究成果

1) 広域的・定量的分析

統計的分析

「村落基本情報」の元データを、郡レベルで集計し、イサーン全域で、「赤シャツ」の指標である2014年総選挙のタクシン派政党（プアタイ党）の比例代表での得票率と、2016年の憲法草案の国民投票の反対票率との相関関係を探したが、有意な結果が得られなかった。ウボンラチャタニ県のみについていけば、森林面積が多いところは「赤シャツ」支持が低いという傾向が見られた。

広域調査

イサーンのなかで、生態的な環境や「赤シャツ」の組織のされ方が異なる2つの県（ウボンラチャタニ県とマハーサラカム県）を広域的に調査した。それにより、ウボンラチャタニ県では比較的自然資源が多く残り、また、ゴム栽培も盛んであること、マハーサラカム県では自然資源が乏しく換金作物もあまりない反面、近隣の工場などでの就労の機会が多いことがわかった。ウボンラチャタニ県では「赤シャツ」は自然発生的に組織されたが、マハーサラカム県ではタクシン派国会議員が村長などを通じて上から組織したという違いがあった。こうした多様性が統計的分析で有意な結果が出ない背景にあると考えられた。

2) 定性的事例分析：

ウボンラチャタニ県内で、「赤シャツ」への支持が対照的であった2つの地域（ナムクン郡 TM 村とその周辺地域、および、シームアンマイ郡 NK 村とその周辺地域）を取り上げ、現地で人々に聞き取り調査を行い、比較分析を行った。その結果、以下のことがわかった。

支持の理由

TM 村や周辺地域で大多数の村人たちが「赤シャツ」を支持していた理由は、多くの場合、タクシン派政権の政策によって自分自身の生活水準を改善することができたから、ではなかった。この点は、「赤シャツ」集会の参加者の多くが、農業以外のセクターに経済的には多く依存する農民層であり、自分自身の事業の発展にタクシン政権の政策から恩恵を受けた人たちだったとする Naruemon and MacCargo [2011: 1000-1009]の分析とは異なる。タクシンが「貧しいイサーンの農民」を助けたこと、タクシン派政権が選挙公約に掲げた政策を実行したこと人びとが突き動かされていた。「貧しいイサーンの農民」としてのアイデンティティを共有し、個人的利害よりも「貧しいイサーンの農民」への集合的な恩恵が、タクシンに対する支持につながり、翻って、非民主的なアピシット政権や「赤シャツ」に対する不公正な二重基準による抑圧への怒りにつながった。「赤シャツ」支持者たちは、実際には、「下位中間層」と呼べる程度まで経済的に上昇していたが、Aphichat [2010: 20-24]が指摘するように、不安定な所得とそれを補うだけの貯蓄が不十分で、借金を抱えているという脆弱性に対する不安から、「貧しいイサーンの農民」というアイデンティティを持ち続けたのだと思われる。

支持の濃淡

「赤シャツ」支持の濃淡は、1) TM 村内、2) TM 村周辺地域内、3) TM 村周辺地域と NK 村周辺地域の比較、という3つの異なる地理的なスケールでのものを含んでいた。

TM 村では村人のほとんどは「赤シャツ」支持だった。そのなかであって、TM 村の Tp さんは、「自分は無関心だ」と主張した。Tp さんも、「村落基金」や「30 パーツ医療」の恩恵を受けてはいるが、「自分の持てるもので生きる」という意識を持っている。政策による支援は、あればただ受け取るだけで、期待や依存をした生活設計はしない。だから、そうした政策を理由にタクシンや「赤シャツ」を支持するという気持ちにもならない。その裏返しで、コメ以外の副食物の材料の半分以上を自給するなど、ほかの村人に比べれば、自然資源に依存する傾向が強い。

TM 村の周辺地域でもほとんどの村人は「赤シャツ」支持だった。ただし、例外的に、村人のほとんどが「赤シャツ」に無関心な村があった。そこでの村人たちの市場経済に大きく依存した生業、生活スタイル、社会経済的な状況は、TM 村などほかの村と顕著に違うところはなかった。ただし、自給用や販売用に自然資源を採取することが可能な森林が残されていた。人びとは、自分たちが持てるもので生きるという考え方を持っていた。市場経済を否定するわけではないが、自分たちの生存戦略のなかに政府からの支援を折り込むことはしない。除草剤などによって周囲の自然環境が劣化しても、まだ自給的生活を送ろうと思えば送れるだけの自然の森林があった。TM 村など、すでに森林を開墾し尽くしてしまった村では、それは不可能なことだった。

NK 村やその周辺地域を含む、シームアンマイ郡の大部分では、「赤シャツ」への目立った支持は見られなかった。NK 村では、人びとの党派的な政治から距離を置く態度が顕著だった。NK 村とその周辺地域では、ゴムやキャッサバの栽培が広がった「2000 年代前半まで余剰米を販売する以外には、商品作物の栽培がほとんど行われていなかった。現金収入の多くは出稼ぎによるものだった。ゴムやキャッサバの栽培の普及以降は、日常の食料においても、自然資源よりも市場経済への依存が高まってきた。それでも、NK 村では、コミュニティ林をはじめ、自然資源が豊かである。TM 村よりも生活スタイルが自給的である。ここでもやはり、政府の支援を期待や要求はしない。ただ、援助があればただもらっておく、という姿勢である。このことは、タクシンへの強い愛着や、民主主義と選挙によるタクシン派政権の復活を目指す「赤シャツ」運動への共感の薄さにつながった。

いずれの事例でも、生活世界の構築の方向性の違いが、「赤シャツ」の支持・共感の濃淡に結びついていることがわかる。自然資源が乏しく市場経済に依存するしかない場合、政府からの支援が必要不可欠なものとして期待され、「貧しいイサーン農民」という政治的なアイデンティティが現出する。一方、比較的豊かな自然資源が残る地域では、政府の支援がなくてもなんとか生きて行くことが可能である。そういう状況では、特定の政治的集団に肩入れすることを忌避する。

情報の違い

TM 村の周辺地域でも、NK 村の周辺地域でも、出稼ぎなど外の世界との往来はごく普通に見られる。いずれも、Keyes [2014] がいう「コスモポリタン」であった。しかし、それだけで、同じように民主主義に目覚め、「赤シャツ」を支持するわけではなかった。それ以外のさまざまなチャンネルからの情報が複層的に影響していた。

パラボラアンテナの普及は「赤シャツ」支持の大きな要因だった。TM 村のコアな参加者の多くは「赤シャツ」についての情報を UDD の衛星放送番組より得ていた。そこで中継される集会での「赤シャツ」リーダーたちの演説に感化され、支持を強めていった。2009 年、2010 年時点でのパラボラアンテナの普及率が、シームアンマイ郡よりナムクム郡のほうが高かったことは、この二つの郡の間での「赤シャツ」支持の濃淡と関連しているという説明は妥当に見える。

しかし、TM 村内や TM 村の周辺地域での参加の濃淡は、それでは説明できない。やはり、Te さんのようなリーダーとの個人的な関係が、集会に参加するかどうかを大きく左右する。リーダーとの個人的な関係がないと、タクシンや「赤シャツ」を支持はしても、集会などのイベントに参加するには至らない。同様に、シームアンマイ郡の NK 村やその周辺地域では、支持自体は、リーダーがいなくても広まり得た。なので、村落リーダーたちが考えたような、リーダーがいなかったから「赤シャツ」支持が広まらなかった、という説は疑わしい。

地元タクシン派政党の有力政治家がいるかどうか、一定の影響が考えられる。ナムクム郡の Te さんや N さんは、地元選出のタクシン派の議員によって組織されたわけではなかった。ナムクム郡の「赤シャツ」のグループが、議員から活動のための支援を受けていたのは事実だ。しかし、議員とのコネクションが「赤シャツ」支持・参加の拡大の必要条件であったとはいえないだろう。

文献

- Aphichat Satitniramai. 2010. Suea daeng khue khrai: mop toem ngoen, phrai rue chon chan klang mai kap thang phraeng khong sangkhom thai [「赤シャツ」は誰か？雇われモブ、隷属民、それとも新中間層か タイ社会の岐路に]. Kitiphong Sonthisamphan ed. Red Why: daeng thammai. Open Books: 24-35.
- Keyes, Charles. 2014. Finding Their Voice: Northeastern Villagers and the Thai State. Chiang Mai: Silkworm Books.
- Naruemon Thabchumpon and McCargo, Duncan. 2011. Urbanized villagers in the 2010 Thai redshirt protests: Not just poor farmers? Asian Survey 51-6: 993-1018.
- 藤田渡. 2016. 「ゴムを植えることにした人たち-タイ東北部農村から見るグローバル化」『東南アジア研究』54 巻 1 号: 2-32.
- 玉田芳史. 2011. 「タイ政治における黄シャツと赤シャツ: 誰、なぜ、どこへ」『国際情勢』81: 143-159.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 藤田 渡	4. 巻 60
2. 論文標題 イサーンにおける「赤シャツ」農民の生態学	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東南アジア研究	6. 最初と最後の頁 146 ~ 182
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20495/tak.60.2_146	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤田 渡	4. 巻 63
2. 論文標題 タイ・軍政権下の「コミュニティ林法」成立 「権利論」と「政策論」の視点からの分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アジア経済	6. 最初と最後の頁 21 ~ 44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24765/ajikeizai.63.1_21	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤田渡	4. 巻 27
2. 論文標題 自然再生事業と住民との協働の「偶然の成功」 - タイ・プリラム県ヒガシオオヅル野生復帰事業の事例から -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 環境社会学研究	6. 最初と最後の頁 144-159
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤田渡	4. 巻 43 - 1
2. 論文標題 すれ違う里山のイメージ：政府・地元・ボランティアの社会的布置	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 地域自然史と保全	6. 最初と最後の頁 15-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Wataru Fujita	4. 巻 9-3
2. 論文標題 The Rubber Boom Assemblage and Internalized Friction: Attitudes of the Government, NGOs, and Farmers in Northeast Thailand	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Southeast Asian Studies	6. 最初と最後の頁 381-411
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤田渡	4. 巻 16
2. 論文標題 「里山」ナショナリズムの展開図 国会議事録から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人間科学:大阪府立大学紀要	6. 最初と最後の頁 71-97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Wataru Fujita	4. 巻 受理済
2. 論文標題 The Rubber Boom Assemblage and Internalized Friction: Attitudes of the Government, NGOs, and Farmers in Northeast Thailand	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Southeast Asian Studies	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤田渡	4. 巻 56-2
2. 論文標題 道路封鎖の論理と感情 タイ南部のゴム農民による集会現場から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東南アジア研究	6. 最初と最後の頁 215-239
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20495/tak.56.2_215	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤田 渡	4. 巻 18
2. 論文標題 「王室主導プロジェクト」の森林政策・行政のなかでの役割	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 年報タイ研究	6. 最初と最後の頁 21-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤田 渡	4. 巻 55
2. 論文標題 ホワイトカラー農民の出現	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東南アジア研究	6. 最初と最後の頁 346 ~ 366
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20495/tak.55.2_346	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤田 渡	4. 巻 54
2. 論文標題 里山のポリティクス：エコロジカル・ナショナリズム研究序説	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 甲南女子大学研究紀要 (文学・文化編)	6. 最初と最後の頁 29 ~ 45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤田 渡	4. 巻 印刷中
2. 論文標題 道路封鎖の論理と感情 タイ南部のゴム農民による集会現場から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東南アジア研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Wataru Fujita
2. 発表標題 Mottled Imagination and Sympathy of Peasants: Considering Political Peasants from Livelihood Ecology
3. 学会等名 EuroSEAS 2019 Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Wataru Fujita
2. 発表標題 Sympathy/Indifference: Ecological Understanding of Different Political Attitudes among Isan Peasants
3. 学会等名 AAS in Asia Conference, Asia in Motion: Asia in Rise? (Association of Asian Studies) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤田 渡
2. 発表標題 暮らしのなかの「水」のゆくえ: 東北・南部の農村から
3. 学会等名 日本タイ学会第21回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤田 渡
2. 発表標題 「赤シャツ」農民がみた選挙: ウボン県のある村から
3. 学会等名 日本タイ学会第21回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤田渡
2. 発表標題 「赤シャツ」運動の濃淡 ウボンラチャタニ県における「村落基本データ」と2016年国民投票結果から
3. 学会等名 日本タイ学会第20回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Wataru Fujita
2. 発表標題 Social Adaptation to Rubber Boom Attitudes of Government, NGOs and Farmers in Northeast Thailand
3. 学会等名 Consortium for Southeast Asian Studies in Asia (SEASIA) Conference 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 藤田 渡
2. 発表標題 国王の威徳で森を守る タイの森林政策における「王室主導プロジェクト」の位置づけ
3. 学会等名 日本タイ学会第19回研究大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 林田秀樹(編著)、生方史数、河合真之、小泉佑介、永田淳嗣、新井祥穂、増田和也、山越言、加藤剛、寺内大左、藤田渡、北村由美	4. 発行年 2021年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 316
3. 書名 アブラヤシ農園問題の研究 【ローカル編】農園開発と地域社会の構造変化を追う	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
タイ	チュラロンコン大学	ウボンラチャタニ大学	マハーサラカム大学	